

サンゴ礁保全行動計画の策定について（案） ～ 新たな「生態系保全調和型地域づくり」に向けて ～

1. 背景

サンゴ礁生態系は、豊かな生物多様性と大きな基礎生産を特徴とする生態系であり、沿岸生態系の中の重要な役割を担っている。一方で、陸域からの土壌や汚濁水等の流入、漁業や観光による過剰利用、オニヒトデ等の大量発生、海水温上昇を主因とする白化現象、ホワイトシンドローム等の病気等によって劣化が深刻なレベルに達している。サンゴ礁に面する地域は、直接的・間接的に様々な形でサンゴ礁生態系に依存しているため、サンゴ礁生態系の劣化が、地域社会に大きな悪影響を与えつつある。サンゴ礁の劣化の問題は、単に自然の生態系の問題にとどまらず、地域社会の持続的な発展を脅かす課題と言える。

地域社会は、サンゴ礁から多大な恩恵を受ける立場にあると同時に、サンゴ礁生態系の劣化の主要な原因をもたらす存在でもある。そのため、サンゴ礁生態系の劣化を食い止め、持続的にサンゴ礁生態系の恵みを享受していくには、地域社会のあり方を、「生態系保全調和型地域づくり」の観点から見直し、地域社会の持続的な発展という視点から、サンゴ礁生態系の保全に取り組む必要がある。

この課題に具体的に取り組むには、サンゴ礁生態系の危機的な現状についての認識を深め、問題意識を様々な関係者が共有したうえで、これまで個別に取り組まれていた様々な活動を、「生態系保全調和型地域づくり」の観点から、十分な情報・意見交換に基づいた連携体制のもとに再構築する必要がある。そのためには、様々な関係者による、十分な議論を通じて、サンゴ礁生態系保全と地域社会の持続的な発展を具体化するための「サンゴ礁保全行動計画」を策定する必要がある。行動計画の策定に参画することによって、各活動主体は、「生態系保全調和型地域づくり」という新たな視点の下で、個々の活動目標や意義付けをより明瞭に設定することが可能になる。

なお、「生態系保全調和型地域づくり」の観点は、サンゴ礁生態系に限らず、他の様々な沿岸生態系の保全の取組に当たっても共通の手法と考えられる。さらに、沿岸生態系の劣化がわが国以上に急速に進行しつつあるアジア・オセアニアの沿岸域の生態系保全と持続的地域社会づくりにも有効であると考えられる。そのため、「サンゴ礁保全行動計画」の策定は、わが国のさまざまな沿岸生態系の保全にも寄与し得る取組であると同時に、今後わが国がアジア・オセアニアの沿岸生態系保全・地域づくりに貢献していくための重要なステップにもなり得るものと言える。

なお、本保全行動計画では、本州に生息するサンゴ群集も計画の対象とする。

2. 目的

サンゴ礁生態系を中心とした沿岸生態系の

- (1) 保全に関する既存の取組みのレビュー
- (2) 劣化の現状とその諸原因に関する包括的な整理
- (3) 保全に関わる様々な主体の情報・意見交換に基づく連携体制構築のためのプラットフォーム形成
- (4) 「サンゴ礁保全行動計画」の策定

3. 手順

- (1) 環境省が、専門家の委員及び関係省庁・関係自治体からなる「サンゴ礁保

全行動計画策定会議」を開催し、会議での検討結果に基づきサンゴ礁保全行動計画を策定する。

- (2) 検討にあたっては、同「策定会議」のもとに、「サンゴ礁価値評価分科会」、「サンゴ礁保全・再生に向けての統合的沿岸管理分科会」を開催し、各課題について議論を行う。
- (3) サンゴ礁劣化の現状とその原因の評価については、「モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査ワーキンググループ」で議論を行い、その結果を参考とする。
- (4) なお、「サンゴ礁保全行動計画」の策定後は、本策定会議を「サンゴ礁保全連絡会議（仮称）」として、保全に対する取り組みの連絡調整の目的で、年1回程度開催する。

4. サンゴ礁保全行動計画策定会議構成：

(1) 委員（敬称略、順不同）

- ・岩瀬文人（財団法人 黒潮生物研究財団 黒潮生物研究所 研究所長）
- ・鹿熊信一郎（沖縄県 八重山支庁 農林水産整備課 主幹）
- ・土屋 誠（琉球大学 理学部長、教授）
- ・寺崎竜雄（財団法人 日本交通公社 企画課長）
- ・中野義勝（琉球大学 熱帯生物圏研究センター 瀬底実験所 技術専門職員）
- ・灘岡和夫（東京工業大学 大学院 情報工学研究科 教授）
- ・林原 毅（独立行政法人 水産総合研究センター-西海区水産研究所石垣支所 主任研究員）
- ・日高道雄（琉球大学 理学部 教授）
- ・古川恵太（国土技術政策総合研究所 海洋環境研究室 室長）
- ・山野博哉（独立行政法人 国立環境研究所 地球環境センター 衛星観測研究所 主任研究員）
- ・安村茂樹（財団法人 世界自然保護基金日本委員会）

(2) 関係省庁

(3) 関係自治体

5. 会議の開催予定

2008 年度

第1回（6月）：策定会議の開催について、サンゴ礁保全行動計画の策定について、サンゴ礁の現状について、現在実施されている対策について、今後の予定 等

○個別の課題について、分科会を開催。
（次年度前半までに数回開催）

第2回（3月頃）：各分科会からの報告、普及啓発について検討 等

2009 年度

第3回（6月頃）：計画とりまとめの方向について

第4回（9月頃）：計画案の骨子について

第5回（12月頃）：計画案について

○パブリックコメント

第 6 回（3 月頃）：計画案のとりまとめ、計画策定後の取組について

6. 分科会構成

(1) サンゴ礁価値評価分科会

- 内 容：①自然環境の経済的な評価手法のレビュー
 ②価値の定量化の可能性のある機能（漁場、環境浄化、防災、観光）
 の評価
 ③定量化できない価値の評価

- 委 員：・土屋 誠（琉球大学 理学部長、教授）
 ・藤田陽子（琉球大学法文学部 准教授）
 ・工藤貴史（東京海洋大学 准教授）

- 予 定：2008 年度 第 1 回（6 月）評価手法のレビュー、サンゴ礁の価値
 の整理、評価手法の検討 等
 第 2 回（9 月頃）評価手法の確認、定量的な評価（案）、
 定性的な評価（案）
 第 3 回（12 月頃）評価内容の決定

(2) サンゴ礁保全・再生に向けての統合的沿岸管理分科会

- 内 容：①統合的な沿岸域管理
 (i) 陸域起源の負荷の制御
 (ii) 直接的な利用（観光、漁業等）と保全との調和
 (iii) 保護地域の設定・管理のあり方
 （生態系ネットワーク形成の視点を含む）
 (iv) オニヒトデ等の食害生物対策
 (v) サンゴ移植等のサンゴ礁再生技術の評価と開発
 (vi) モニタリングシステムの構築と運営
 (vii) その他
 ②海洋の温暖化・酸性化
 ③サンゴの病気等
 ④その他

- 委 員：・鹿熊信一郎（沖縄県 八重山支庁 農林水産整備課）
 ・寺崎竜雄（財団法人 日本交通公社 企画課長）
 ・中野義勝（琉球大学 熱帯生物圏研究センター 瀬底実験所 技術専門
 職員）
 ・灘岡和夫（東京工業大学 大学院 情報工学研究科 教授）
 ・林原 毅（独立行政法人 水産総合研究センター西海区水産研究所
 石垣支所 主任研究員）
 ・日高道雄（琉球大学 理学部 教授）
 ・安村茂樹（財団法人 世界自然保護基金日本委員会）

- 予 定：2008 年度 第 1 回（7 月頃）保全・再生状況、実施主体等の整理、
 フリーディスカッション 等
 第 2 回（8 月頃）直接的な利用・保全について（水産・
 観光の優良事例、オニヒトデ対策、国内の MPA 制度の報告、現在の海外での
 MPA の考え方、その他対策がとられて

- いない課題) 等
- 第 3 回 (9 月頃) 直接的な利用・保全についての考え方の整理 等
- 第 4 回 (12 月頃) 中間とりまとめ (現状・負荷要因・回復要因) 等
- 第 5 回 (1 月頃) 陸域起源の負荷の対策の考え方 (負荷レベルの検討)、今後、モニタリングが必要な項目 等
- 2009 年度 第 6 回 (6 月頃) 計画に記載すべき統合的沿岸管理の論点整理について (各対策の実施主体等) 等
- 第 7 回 (7 月頃) 統合的管理に関する計画での記載内容について

7. モニタリング 1000 サンゴ礁調査ワーキンググループで行う議論について

(1) モニタリングサイト 1000 (サンゴ礁調査) の概要

平成 15 年度から、全国に 24 のモニタリングサイト (436 調査地点) を設定し、サンゴ群集・サンゴ礁の現状を把握するためのモニタリング調査を実施。

ワーキンググループ委員：

- ・岩尾研二 (財団法人 熱帯海洋生態研究振興財団 阿嘉島臨海研究所 研究員)
- ・岩瀬文人 (財団法人 黒潮生物研究財団 黒潮生物研究所 研究所長)
- ・梶原健次 (宮古島市役所 調整官)
- ・酒井一彦 (琉球大学熱帯 生物圏研究センター 瀬底実験所 准教授)
- ・佐々木哲朗 (NPO 法人小笠原自然文化研究所 研究員)
- ・野島哲 (九州大学大学院理学府附属天草臨海実験所 助教授)
- ・野村恵一 ((株)串本海中公園センター 学術部 課長代理)
- ・横地洋之 (東海大学 准教授)

(2) 議論の内容

サンゴ礁劣化の現状と原因の分析評価について

内 容：①サンゴ礁の現状の分析評価

②サンゴ礁の劣化とその原因の分析把握

例) ・陸域起源の負荷評価

(赤土、栄養塩、有機汚濁、農薬などの発生源評価)

- ・直接的な利用 (観光、漁業等)
- ・オニヒトデ、サンゴの病気の影響等
- ・白化等地球規模環境変動による影響